
僕の死神日記

仲達 あいら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の死神日記

【Nコード】

N8466Q

【作者名】

仲達 あいら

【あらすじ】

僕と上司になる人たちのほのぼのコメディー。

オリキャラ出ます。あとたぶんキャラ崩壊します。

プロローグ

僕は、死神・・・になるところだ。

かさいたくや
葛西拓也。それが僕の名前。

霊術院を卒業していざ死神！！つてところで熱出してぶっ倒れて、同期の仲間たちより半年遅れての死神デビュー！。

・・・なんだけど

「か・・・葛西拓也、です」

僕の目の前にいる人・・・訂正、死神。

「うむ」

山本元柳齋重國総隊長・・・略して総隊長。（と、しゃべってないけど雀部長次郎副隊長）

「今日から隊決定のため、研修をしてもらう。」

「はい。」

「案内は十三番隊、朽木ルキア。」

「はい」

朽木？朽木って言ったよね総隊長。あの朽木かな？

「では・・・朽木と顔合わせがてらまずは十三番隊を見てくるとよい。その後は仕事の邪魔にならないよう、まわれ」

「はっ」

・・・で、十三番隊舍って、どこ？

プロローグ（後書き）

二次創作初挑戦！感想・ご指摘をお願いします
あと、短い・・・

研修先

やっと十三番隊隊舎に到着すると黒髪の女の死神が前に立っていた。

「あ、あの………」

とりあえず声をかけてみると、その死神はこっちを向いて微笑んだ。

「葛西拓也か？」

「は、はい。」

「私は十三番隊、朽木ルキアだ。お前の案内係を務める。」

「あ、よろしくお願いします。」

「まずは十三番隊………と思ったのだが、」

「はあ」

ここでルキアさん（って呼んでいいのかな？）は少し困ったような顔をした。

「じつは浮竹隊長が体調を崩されて十三番隊の研修は後日にしてほしいのだ。」

「わ、わかりました。」

「そこで先に他の隊を研修してもらいたいのだがどこか希望はあるか？」

「いえ………」

と、いうかありすぎて困る。霊術院時代は十番隊がよかった（楽しそうだから）けど、今は十一番隊もいいよな………

「では、とりあえず隣の十二番隊に行こう。隊長副隊長はあ………
……少々変わった方たちだが、そそうのないようにな。」

「はい」

と、言うわけで十二番隊にやってきた僕とルキアさん。でも、大丈夫かなあ。霊術院時代ってあんまりいい噂聞かなかった気がする………

研修先（後書き）

くくろつちゝってどうやったら漢字で出せますか？誰か知ってる人がいたら教えてください。

命の危険（前書き）

たぶん言葉遣いがめちゃくちゃです。すみません。

命の危険

・・・なんていうか、怖い。

「なんの用だネ。」

十二番隊隊長の涅マユリ隊長は、仮面のような、マスクのようなものをした方だった。

「新人をつれてきました。総隊長から連絡があったと思うのですが・・・」

なんとなくルキアさんも緊張しているのがわかる。涅隊長はフン、と鼻を鳴らすと

「そんなもの知らないネ。」

と答える。そうなの？

「そ、そんなはずは・・・」

ルキアさんも困ったように言う。

「まあいい。ちょうど今退屈していたところだったのだヨ。聞いてやらないこともないネ。ネム」

「はい、マユリ様」

うわっ！どこから出てきたんだ、この人。

「これから新人を解剖するヨ。準備。」

「はい、マユリ様。」

解体！？ち、ちよっとこれどうなるの、僕！？

ルキアさんもあわてた様子で

「お、お待ち下さい、涅隊長、涅副隊長・・・」

と必死に止めてくれる。というかこの人副隊長だったんだ。しかも苗字が同じってもしかして親子？ぜんぜん似てない・・・

「チツ・・・仕方ない、これは貸しひとつだヨ。本当に役に立たないやつらだネ。」

結局、十二番隊の死神、技術開発局の人と僕、ルキアさんが全員で涅隊長を止めた結果、そう言って涅隊長は僕の解体を中止してくれた。

「……冗談でもなんでもなく、寿命が縮んだ。（でも死神に寿命あるのかな？）」

「えっと、葛西拓也です。」

技術開発局の人たちも残って、僕は何十人もの先輩死神の前で自己紹介をする羽目に。……人前、苦手なんだよなあ……

「ちよつと体調を崩してまして、半年遅れで死神になります。よろしく願います。」

よし、完璧。たぶん失礼はないはず。……と思ったのに
「質問だヨ」

涅隊長うゝ。なんか怖いから答えたくないんですけど。

「キミはなんで解剖を拒否するのかネ。折角私が解体すると言っているのだヨ？」

「は、はあ……」

これ、どうやって答えると？ルキアさあゝん！ヘルプミー！

「あ、ええとですね。」

お、僕の必死の救助要請アイコンタクトに気づいたのかルキアさんが口を開く。
ルキアさんは命の恩人だあ！

「申し訳ありません、涅隊長。そろそろ次の隊に行きたいと思うのですが……返事は後日、ということをお願いできないでしょうか。」

「そ、そうですよ。きちんとした返事もらったほうがいいですし。」

技術開発局の人（名前を知らないけど）も手伝ってくれている。僕もガバツと頭を下げる。じゃないと生きて（死んでるけど）ここから出れない。

「……お願いします……」

最後は何十人の大合唱。この合唱に参加してないのは隊長と副隊長だけ。涅隊長は面白くなさそうな顔をして席を立った。

「面白くないネ。ネム。とっておいた実験材料を解剖する。ついてこい。」

「はい、マユリ様」

隊長と部屋を出る副隊長。

・・・・・・・・たすかったあ・・・・・・・・

命の危険（後書き）

誤字・脱字があったら教えてください。また、「この言葉遣いおかしい」と感じたところがあったら教えていただけるとうれしいです。

命の危険2

十一番隊。「戦闘専門部隊」の異名を持ち、また隊長の名をとって「更木隊」とも呼ばれる。「剣八」の名を継いだ者が隊長になる、というルールがある。

これが、霊術院で僕が学んだこと。同期の仲間たちからの話もあって、怖い人が多いのだろぅとなんともなく思ってた。……が葛西拓也……です。お願いします。」

それ以上だった。十一番隊の人たちは。

十二番隊を出て、僕とルキアさんが向かったのは十一番隊。やっぱり男としてはちょっと憧れるところがあつて、楽しみにしていた。もしかしたら十一番隊に入隊しようかな……とも思ってたんだけど。

「……」

無言で値踏みする十一番隊隊士……。怖い。正直、今すぐここから逃げ出したい。

僕を取り囲んでる隊士たちはみんないかつい顔で僕を見てる。特に目立つのはおかつぱ頭で睫毛がものすごいことになってる人（さつきから「美しくない……」とか呟いてる。）と、坊主頭の人。なんかその二人だけ雰囲気が違う。

「あ、あの……」

僕が口を開いたとき、前方からピンクの塊が飛んできた。

いや、ピンクの髪をした少女が飛んできた

「つて・・・え！？何？え？」

明らかにこの雰囲気にならない少女はそれでいてこの空気に溶け込んでいた。

「ヤッホー！新しい人？」

そのピンクの少女はルキアさんの足元に張り付きながら聞く。ルキアさんはあわてた様子でその少女を引き離す。

「葛西、こちらは草鹿副隊長だ。」

「副隊長つて・・・どこの？」

いや、この状況から答えはひとつしかないわけだが、あまりにも十一番隊のイメージとかけ離れていてなかなかイコールで結べない。しかし、ルキアさんは「なにを言うのだ」という顔で

「十一番隊に決まってるだろう。」

「・・・ですよね。」

「まーそうは見えないよな。」

口を挟んだのは坊主頭の人。草鹿副隊長はぷうつと頬を膨らませた。が、その仕草も僕が思っていた十一番隊のイメージとはちよつと違う。

「そんなことないもん！つるりんの癖に！」

やってることは完全に幼児。しかし「つるりん」と呼ばれた坊主頭の方はビキツと額に青筋を浮かべる。

「つっ・・・てめえ！」

上司（だよな？）にむかつてとんでもない言葉を叫んでいるが十

一番隊の隊士は「いつものこと」とばかりに止めることをしない。おかつぱの人なんか完全に口元が笑ってる。

「うるせえぞ一角！」

しばらく追いかけてこをしていた二人を止めたのは大きな声。隊士たちの奥から出てきたのはすごく大きくて、威圧感のある人。隊長羽織を羽織っているからこの人が「更木剣八」隊長だろう。

右目には眼帯をしていて、髪は十一本に分けてある。その先にあるのは鈴だろうか？副隊長と違ってイメージどおりの人だ。

「ああ？なんだお前」

隊長に見下ろされると少し怖いんですけど・・・と、ここで草鹿副隊長がぴよんと隊長の背中に張り付き、肩の辺りから顔を出した。

「新しい人だよ！」

「あ、葛西拓也です。」

「じゃあ・・・かつくんだ！」

「かつくん？」

「うん！葛西だから、かつくん！」

満面の笑みで言う副隊長。僕はあはは、と笑うと隊長のほうを見る。

「で、どうすればいいんだ？」

「面倒くさい」という雰囲気を感じそうともせずに聞く更木隊長。ルキアさんは

「とりあえず研修ですので隊舎を回ったりしていただけたら「面倒だ。一角やつとけ。」」

ルキアさんが言い終わる前に隊長は坊主頭の人に押し付ける。ふん、一角さんって言うんだ。

「えー・・・嫌ですよ。俺だって稽古があるし。弓親、やつとけ」

「僕だって遠慮したいね。美しくない仕事するのは好まない。」おかつぱのひと、きつぱり。目の前で仕事の押し付け合いをされるのはちよつと落ち込むんだけど、二人はそんなの気づいてない様

子で

「大体、隊長は一角に言ったんだから一角がやらなきゃ。」

「そんなこと言ってもよ・・・」

と、いい加減落ち込んでいたところに一人の隊士が手を上げた。

副隊長が

「なぐに、マキマキ？」

と聞くとマキマキさんは

「いや、提案がありまして・・・」

と、口を開く。言い争いをしていた二人もマキマキさんのほうを向き

「なんだ？」

「美しくない提案だったら却下するよ。」

と返す。マキマキさんはその外見に似合わずオズオズと

「いや、ここは十一番隊らしく、新人に稽古をつければいいのでは、と」

「マキマキあつたまい」

「なるほど」

「なかなかいい提案じゃないか。」

と十一番隊の面々が賛成する中、驚いたのは僕とルキアさんで

「ち、ちよつとまってください！」

と声を上げるも、盛り上がっている十一番隊隊士の皆様には通じず。

「よ、よろしくお願いします。」

気がついたら僕は発案者のマキマキさんと木刀を持って向き合っていた。もちろん手加減はしてくれるんだろうが怪我をするどころか死にそうで怖い。

少し離れたところでは申し訳なそうに立っているルキアさんと十一番隊隊士の人たち。と、ルキアさんが口パクで何かを伝えようと

している。よく目を凝らすと

「よ、ん、ば、ん、た、い、は、よ、ん、で、あ、る」

よんばんたいはよんである・・・四番隊は呼んである・・・って
ええ！！？僕怪我すること（やっぱり）確定？

「はじめ！」

名も知らない十一番隊隊士の合図で僕とマキマキさんはぶつかっ
た・・・はずだった。のに

「え・・・」

僕はその瞬間、床に転がされていた。そりゃ僕はどちらかという
と鬼道のほうが得意だったけど、それにしたってこの実力差・・・

「あーあ、やっぱすぐ終わったか。」

上のほうから一角さんの声がする。

「ま、これでも十一番隊に入りたいなら、そのときはしごいてあげ
るよ、一角が。」

弓親さんの声もする。でも、もうなんか入ってこない・・・

「俺に・・・よ。つか・・・手加減・・・。」

「あーあ・・・これ、・・・じゃないの？」

二人はまだ何か言ってるけど、もうなにを言ってるかわからない。

僕は、静かに意識を沈めた。

命の危険2（後書き）

やっぱりまだ口調に不安が・・・
感想・誤字、脱字あったらお願いします。

安息の地

目覚めると、僕は白い天井を見上げていた。……っていうか、ここどこ？

「あ、ルキアさん。新人の方目覚めましたよー」

えーつと、確か十一番隊の「マキマキ」さんと対決して……

「——あ、ものの見事にやられたんだっけ。」

「そうだ」

「わわっつっ！ルキアさん！？」

気がつくと、左のほうにルキアさんが。僕のほうを心配そうな目で見ている。

さらにその隣には、少し気弱そうな、「男」というよりは「男の子」に近い感じの死神。その死神は僕の視線に気づくと、ペコツと頭を下げて、

「あ、四番隊第七席の山田花太郎です」

と、挨拶をしてきた。なるほど。僕の先輩になるかもしれない死神だ。ここは失礼の無いようにしないと。

「現在研修（ほとんど見学）中の葛西拓也です。よろしくお願いします。」

「あ、いえいえこちらこそ……」

おお、なんか僕より立場が上なのに敬語……。……礼儀正しい人なんだなあ……。……

思えば今まで解体されかけたり気絶したりでかなりきつかったかな……。……やつと安息の地が。

「えーつとですね、ルキアさんから連絡を受けて、葛西さんをここに四番隊に搬送したわけですが、どこか痛むところがありますか？」

「まあ、そりやいろいろ……」

正直体中が痛い。花太郎さんはハハハ、と笑うと

「まあ、一日中眠ってたんで体がなまってるかも知れませんが、一

応何の問題ありませんからもう帰っても平気ですよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？丸一日？」

「はい。正確には二十二時間三十分、葛西さんは眠ってました」

「なので予定が押してしまった。今日と明日、明後日の三日間で二、三、四、五、六、七、八、九、十、十三番隊の十隊の研修をして、最後に一番隊に戻らねばならん」

口をはさんだルキアさんは、腕を組んで僕が寝ているベッドの横にあるイスに座る。

「そ・・・・そんなに？」

「ああ。幸い、今すぐ動いても問題はないので、このまま四番隊の研修をしようと思う。その後は――」

「あ、浮竹隊長、いま四番隊で診察を受けてますよ。虎徹三席と小椿三席も一緒です」

「そうか。ならそのあとここで十三番隊の研修を行う」

ルキアさんは腕を組んだままきっぱり断言。でも僕にはひとつ疑問が。

「あの・・・・四番隊で十三番隊の研修をしてもいいんですか？」

「ああ、かまわん。十三番隊は四番隊や十一番隊、十二番隊と違って目に見える特色があるわけではないからな。」

「・・・・・・・・・・？」

「十三番隊の核は『誇り』ということだ。」

「はあ・・・・」

わかるような・・・・イマイチわからないような？僕の視線を受け、ルキアさんは小さく微笑んだ。

「四番隊には『救護』、十一番隊には『戦闘』という、目に見える『核』がある。しかし、十三番隊の核は目には見えない。それが『誇り』だ。」

「なるほど」

僕が納得した声を出すと、花太郎さんはあわてて

「あ、でもちゃんと四番隊にも心の『核』はありますよ。」

と付け足した。ルキアさんはそれに笑って答えると、席を立った。
「さて」

僕も立ち上がって、ルキアさんの言葉を待つ。

「研修再開だ」

四番隊。

さて、四番隊の研修。これに関して報告することがひとつ。

「あの、僕鬼道苦手なんですけど・・・」

「ええっ！？どうしよう・・・？」

僕の研修を見てくれることになった花太郎さんは困ったように声を上げる。確かに鬼道が苦手だったらあまり研修の意味がないような・・・

「まあ、とりあえず面接という形で隊長、副隊長と話してみては？鬼道はあとから練習してもいいですし」

そのときは手伝いますよ、と付け足す花太郎さん。四番隊はこんな風な人が多いといいな。

と、言うわけで、現在僕は四番隊隊長、副隊長と向かい合っている。隊長のほうはニコニコと穏やかな笑みを浮かべている。副隊長は・・・何というか大きい人だな。でも人はよさそうな雰囲気。

「四番隊隊長、卯ノ花烈です。こちらは副隊長の――」

「あ、虎徹勇音です」

「葛西拓也です。よろしくお願いします」

まずはお互いにお辞儀。なんていうか・・・こんなにも普通に挨拶が出来ることが嬉しいとは。

「あの、僕鬼道苦手なんですけど・・・」

「構いませんよ。やる気があればおのずと力は身につくものです」
卯ノ花隊長がそういつて微笑む。本当に楽しそうだな、この隊。

・・・と、おもったら。

「卯ノ花隊長！十一番隊から搬送された隊士がまた暴れだしてっ！」

面接会場に飛び込んでくる四番隊隊士。卯ノ花隊長は静かに立ち上がると

「勇音」

と声をかけた。その言葉だけで虎徹副隊長には通じたのかコクリとうなずくと卯の花隊長と共に部屋の外へ出る。

しばらくして。

「どうもすみませんでしたっ」

ガラガラ声が四番隊隊舎に響き渡ると同時に卯ノ花隊長と虎徹副隊長が戻ってきた。どうも卯ノ花隊長が暴れていた十一番隊隊士を静めてきたようだ。

・・・・・・・・どんな手を使ったんだろう・・・・・・・・

平和。(嵐の前の静けさとも言つ)(前書き)

久々です!! サブタイトルは次話に関係しますので楽しみに。

平和。(嵐の前の静けさとも言っ)

さて、お次は十三番隊。ここまでくるともうどんなに怖い人が来ても驚かないぞ・・・と、思ったのだが

「ああ、君が葛西君か。診察を受けながらで悪いが研修を始めようか」

予想に反して十三番隊の隊長・浮竹隊長は優しそうな人だった。その両隣にはもう二人、死神が立っている。

「僕は十三番隊隊長の浮竹十四郎。こっちの二人は三席の虎徹と小椿だ」

「か、葛西です！よろしくお願いします!!」
頭輪下げる僕に浮竹隊長は朗らかに笑って

「まあそう硬くならずに。質問には何でも答えよう」

「え・・・」

いきなりそんなこと言われても質問なんて考えてない。ていうかこれは研修ではなく面接なのでは・・・

「じゃあ、こちらが質問しようか。そうだな・・・じゃあ君の好きな食べ物は何なんだい？」

「え、と・・・あ。辛いもの以外なら何でも平気ですけど・・・」

「そうか。じゃあ今度甘いものでもご馳走しよう。そうだな、じゃあ君は何番隊に入ろうと思ってるんだい？」

「まだ良くわからないですけど・・・。自分の力を生かせる場所が良いです」

そう答えると浮竹隊長は満足げに笑って

「そうか、そうか」

とうなずいている。と、そこで横にいた女性死神——虎徹清音三席が口を挟んだ。

「隊長、そろそろお戻りになられたほうが・・・」

「ああっ!!ずるいぞお前!!今俺が言おうとしたことを!!」

「うつさいわね！あんたが遅かっただけじゃない！」

たちまち（浮竹隊長はさんで）言い争いをはじめる三席二人。
浮竹隊長もこれには苦笑して、

「ほらほら、やめないか二人とも。葛西君が怖がってしまうぞ」

「いえ・・・」

「まあ、確かにそろそろ終わりにしたほうがよさそうだ。まだあるんだろ、朽木？」

「あ、はい！まだ幾つか・・・」

成り行きをずっと見ていたルキアさんがここで始めて声を発する。
それを聞いて浮竹隊長はやさしい笑顔を見せた。

「そうか、ではこれで研修を終わりにするか。葛西君、もし良かったら今度十三番隊に来るといい。一緒にお茶でも飲もうじゃないか」
「は、はい！！ありがとうございます！！」

こうして十三番隊の研修は平和に終了したのだった。

平和。(嵐の前の静けさとも言っ)(後書き)

誤字・脱字・「このキャラしゃべり方違う・・・」などありましたら教えてくださると幸いです。できうる限り修正させていただきます。

諸事情によりタイトルは自主規制（笑）（前書き）

何でしょうね、これ・・・（汗）

諸事情によりタイトルは自主規制（笑）

本日最後の研修先は十番隊らしい。何でもその十番隊は最年少の天才隊長と護廷十三隊でも人気の女性隊長が率いているらしい。

・・・と、言うのが僕が事前に知っていた情報。そして今、その情報はだんだん書き換えられつつある。

「松本おーっ！！昼間から酒飲んでないで仕事しろー！！」

「嫌ですなたいちよ、今は休憩時間ですよ？」

「おめえは四六時中休憩してんじゃねえかー！！」

扉を開いたとたん、目に飛び込んできたのは銀髪の少年がソファに寝転ぶ女性をかりつけているところ。っていうかこの少年・・・たぶん隊長だと思うけど、僕より小さいんじゃないだろうか。

「それはそれ、これはこれですよ」

「訳わかんねえこと言っただけで仕事しろー！！」

「えー・・・。・・・あ、じゃあ八番隊にこの書類届けてきますね」

「おい、その語尾がお前のしょうとしてる事全てを物語っているんだが」

「やだなあゝ、そんな訳ないじゃないですかあゝ」

僕とルキアさんに気づかないまま言い争いは続く。ルキアさんも声を出せないでいる。

と、思ったら

「という訳で私はこれで——ってあれ？朽木じゃない」

「あ？・・・よお朽木妹。何か用か？」

「あ・・・。新人の研修に参りました。連絡はしたはずなのですが・・・」

「ああ・・・そんな事もあったような」

「・・・松本。俺は聞いてないんだが」

女性副隊長・・・松本副隊長の言葉に少年隊長の眉がピクリと動く。しかし松本副隊長はしれっと

「え？ちゃんと報告しましたよ。その報告書だつて、この中に」

と、自分の机らしきものの上に積まれた書類の山を指す。少年隊長の眉がまたピクリと動くが

「・・・はあ」

とため息をつくだけにとどめる。そしてルキアさんと僕のほうを向いて

「騒がしくてすまなかったな。俺は十番隊隊長の日番谷だ。で、こつちのが・・・」

「はいはい、副隊長の松本乱菊です！！」

お酒が入っているからか少しテンションが高い松本副隊長。それともいつもこういうのだろうか。

「葛西拓也です」

もう何度目になるかのその言葉。よく考えたらそろそろ緊張しなくなってきたかも。

「よろしく」

テンションが高いままで答える松本副隊長。本当にこの人副隊長なのだろうか。

「それより葛西、アンタ酒飲めるわよね？」

「飲めるか」ではなく「飲めるわよね」なのか・・・。

「は、はあ。一応は。」

「そう。それは良かった。・・・ほらあ、隊長、飲みましょうよ？」

「待て。俺は今の会話に飲む要素をひとつも見つけられなかったんだが」

「ええ・・・じゃ、しょうがない。葛西、ほら」

「え？・・・んががががが」

—— 諸事情により自主規制させていただきます b

Y
葛西

おかあさん、僕、もうすぐそっちに・・・

諸事情によりタイトルは自主規制（笑）（後書き）

誤字・脱字等ご指摘お願いします。

あの人の格好って何だっけ?? (前書き)

サブタイトルは気にしないで下さい。

あの人の格好って何だっけ？

気がつくと僕は、ソファの上で寝かされていた。

「・・・ここは・・・」

「あ、起きた？ここは十番隊よ。アンタはアタシの酒に付き合って気絶したの。まさかあの程度で気絶すると思わなかったのよ」

視界には入っていないがこれは松本副隊長の声。と、視界の端に何やらオレンジ色の物体が映った。僕は重たい頭を振って意識を覚醒させながらその物体が何なのかを確認する。

それは、髪の毛だった。その髪の毛の持ち主は日番谷隊長が座る席の前で、なにやら言っている。その人の周りには何か全体的に白い眼鏡の人と髪の毛の長い女性と、色の黒い大男。・・・って待て待て待て！！え、人間混ざってない！？しかしよく見るとその人たちの中にはルキアさんが混ざっている。

「葛西、起きたか」

「何、こいつがルキアが言ってた研修？」

「あ、葛西拓也です」

オレンジ頭の人に挨拶をして、気付く。この人だけは死覇装を来ているのだが、もう一人、眼鏡の人のほうの格好は本で見たことあるような・・・。

「俺は死神代行、黒崎一護！！で、こっちの白いのが石田、こっちが井上でこっちのが茶渡。まあみんなチャドって呼んでんだけどな」

「よろしく」「よろしくね、葛西君！！」「・・・ム」

石田さんは眼鏡を上げて知的に、井上さんは元気に、チャドさんは片手を上げて、僕に挨拶を返す。

「・・・で、死神代行お！？」

「なんだ葛西、知らないのか。・・・あ、そうか。葛西は療養していたのだから当然か」

ルキアさんは腕を組んでうんうん、と納得しているが僕には何がなんだかさっぱり。すると仕方なく、といった感じで日番谷隊長が説明してくれた。

「前にこいつらは事情があつてここに乗り込んできて大暴れした拳銃総隊長から死神代行として認められたんだ」

「冬獅郎、その言い方はひどくないか？」

「日番谷隊長だー!!」

黒崎さんの言葉に机をバンツ!!と叩いて応戦する日番谷隊長。と、そこでさつきまでニヤニヤしながら話を聞いていた松本副隊長に矛先が向かう。

「大体松本、お前が無理に酒を飲ませて葛西をぶっ倒れさせたつづきのが噂になったから黒崎たちが面白がつてきたんだろーが!!何とかしろ!!こいつらが居ると仕事にならねえ!!」

「じゃあ休憩にしません?一護達も一緒に」

「するか!!大体お前はいつもー!!」

と、ここでいつの間にか僕の隣に居たルキアさんが言った。

「葛西、そろそろ行くぞ。まだ行くところはあるんだからな」

「あ・・・はい」

僕は言われるがまま、一応礼をして十番隊の隊舎を出る。なんだか研修になってないような気もするけど、いいのだろうか??

・・・・そういえば、石田さんのあの格好、結局なんだったか
分からなかったな・・・???

あの人の格好って何だっけ?? (後書き)

何だこのグダグダ感・・・。

誤字・脱字がありましたら教えてください。訂正します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8466q/>

僕の死神日記

2011年11月13日08時54分発行